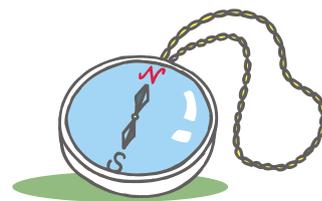


羅 針 盤



第 21 号 令和4年（2022年）10月24日（月）

◆ なぜピカソは『ゲルニカ』を描いたのか

パブロ・ピカソは世代を超えて数多くの人を魅了した世界的に有名な画家です。1937年に、ピカソは戦争の悲惨さを訴える壁画『ゲルニカ』を制作しました。この作品はピカソの代表作とも言われています。親しい友人であった画商のカーンワイラーが、ピカソを「政治意識の薄さでは人後におちない」という言葉を残しているように、ピカソの人生には政治的な行動はほとんど見られませんでした。ピカソだけでなく、自分自身の美を追求するアーティストの多くは、政治にはあまり興味を持たないものようです。それではなぜ、ピカソは『ゲルニカ』を描いたのでしょうか。ピカソが『ゲルニカ』の制作に着手したのは1937年1月のことです。1937年5月からパリで開催される万国博覧会のスペイン館に飾るために、共和国政府からの依頼があったからだそうです。当時スペイン共和国の政府軍は、フランシス・フランコの指揮する反乱軍との内戦が行われていました。スペインを二分したこの内戦で、ピカソは政府軍を支持し『フランコの夢と嘘』という作品を制作して販売し、売上を政府軍に寄付していました。共和国政府からの壁画制作の依頼は、ピカソへの恩返しでもあったようです。制作の当初に、ピカソが壁画の主題に考えていたのは、政治とは無関係のものだったそうです。しかしながら1937年4月に、ドイツ空軍の助力を得たフランコの反乱軍が、バスク地方の小さな街ゲルニカを無差別爆撃して、一般市民を多数殺害したことがニュースになると、一転してこの事件をテーマに絵を描くことにしたそうです。当時、戦争は軍と軍との間で行うものでした。戦略拠点があるとはいえ、一般市民への空爆は史上初の惨事でした。内戦による暴力や混沌に巻き込まれて苦しむ人々の姿を描いた『ゲルニカ』は、美術史において最も力強い反戦絵画芸術の1つとして多数の美術批評家から評価されています。作品で際立っているのは、血相を変えた馬、牛、火の表現。絵画全体は白と黒と灰色のみとなっています。パリの万国博覧会で飾られたあと、世界中の会場で設置はされましたが、『ゲルニカ』はあまり注目を集めませんでした。また、依頼主のスペイン政府の一部の政治家からは「反社会的で馬鹿げた絵画である」といった非難を浴びることとなってしまいました。『ゲルニカ』が本格的に注目をあつめるようになったのは第2次世界大戦以降のことです。20世紀を象徴する絵画であるとされ、その準備と製作に関してもっとも完全に記録されている絵画だといわれています。やがては反戦のシンボルとなり、ピカソの死後にも保管場所をめぐる論争が繰り広げられることとなりました。ピカソ本人は「完全な民主主義国家となるまでゲルニカはスペインには送らない」という信念を持っていました。そのため、ゲルニカは長い間、ヨーロッパを巡回することとなり、スペインが完全な民主主義になるまで『ゲルニカ』はニューヨークで保管されて、『ゲルニカ』誕生から約40年、ついに完全民主化を果たした1981年にスペインに返還されることとなります。ピカソという名前は知っていても、どのような作品を世に残したのかあまり知らない人も多いかと思います。ピカソの作品は時代によって



作風に大きな違いがありますが、『ゲルニカ』はあまりにも世間に大きなインパクトを残した作品のため、特定のジャンルには分けられないのが特徴的な作品でもあります。「芸術は、飾りではない。敵に立ち向かうための武器なのだ。」という言葉を残したピカソにとって、『ゲルニカ』は彼が描いた最も代表的な作品であることに間違いはないことだと思います。